



[特集]

「お

ばあちゃんになったら駄菓子屋をやるのが夢でした。でも、今やってもいいんじゃない？って気づいたんです」そう話すのは、北本団地で『みんなの다가しや ビーム』を開催する大宮和奏さんだ。

これまで、さまざまな「居場所」と出会ってきた和奏さん。小学3年生までは北本団地で育った。「今よりも活気があって、公園に行けばいつも誰かがいました。大学生が物々交換の場『リングルーム』を開いていて、そこにも出入りしてましたね」と当時を振り返る。今にして思えば、団地は確かに

自分の居場所、面白いことができる場所だった。

15歳のころ、流行や周りに合わせることを窮屈に感じていたときにライブハウスに出会った。他者と違った表現が認められる場で、ありのままに居られるようになった。「ライブハウスがここに来れば絶対大丈夫」な場所になってから、居場所自体に興味を持つようになり、自分も、誰かにとつてのライブハウスになれたら良いなと思うようになったんです」

大学では、主に学校教育を学んだ。

学童保育のボランティアに参加したことで「こどもの貧困」という言葉に出会い、こどもたちそれぞれが多様なバックグラウンドを持っていることを知った。しんどい思いをしている子がいるなら、できることをしたい——そうして思っていたのが、駄菓子屋でのこどもの居場所づくりだ。北本で出会った大人たちが背中を押され、今年の2月16日から4月5日の毎週金曜日に、北本団地のシェアキッチン「中庭」で『みんなの다가しや ビーム』を開催した。

「ここに来た子と一緒にビームのチラシを配ったり、SNSを見た親御さんがこどもを連れてきたり、団地の名物

「親ガチャ」って言葉を聞くようになったのはいつからだろう。

格差。分断。閉塞感。

こどもたちを取り巻く環境は、厳しい時代に来ているのかもしれない。

でも。だからこそ。

今、北本市で、こどものために手を取り合う人たちがいる。

こども食堂があちこちで開催され、寄付などの支援は絶えない。

世の中に暗いニュースや悲しい出来事は多くても、

小さな善意がつながるこのまちには、確かな希望がある。

自分らしく笑えてないと感じるきみを。

大きなプレッシャーの中で子育てするあなたを。

「いつも」「ここで」まってる人たちがいる。

今回は、そんな人たちがつくる、こどもの居場所で話を聞いた。

市長公室シティプロモーション・広報担当 (☎ 594-5505)



大宮 和奏さん 教育学部の大学4年生。北本団地出身。あだ名は「わかなっち」。こどものころの将来の夢は「プリキュアになる」。音楽とカメラが好き。

※親でも教師でもない第三者とこどもとの新しい関係

ライブハウスは「ここなら絶対大丈夫」
と思えた場所。今度は私が誰かにとつての
ライブハウスみたいな存在になりたい。